

2011年9月25日

企画委員会 伊藤重隆

第7回 ISSJ 懇話会 開催概要報告

開催日時 平成23年9月7日(水) 午後6時30分 - 8時45分

場所 慶應義塾大学日吉キャンパス協生館6階 大会議室

講演者 慶應義塾大学大学院SDM研究科 嶋津恵子 准教授

テーマ 「INCOSE 標準より見た日本のIT業界」 参加人数 24名

多数の参加となりました。また、SDM研究科で修学中の大学院生の皆さんも多数参加して頂いたので活発な懇話会となりました。有難うございました。

下記に概要をご報告します。第8回も予定しますので会員の皆様の参加をお願いします。

【概要】

INCOSE(International Council on Systems Engineering)は、1990年に設立されたプロジェクトを成功に導く文理融合型のシステムエンジニアリング原則である。システムライフサイクルモデルはISO/IEC 15288に準拠し淵源はIEEE標準である。最近の情報システムトラブルや福島原発事故もINCOSEが主張するSystems Engineeringのメソドロロジーが適用されていない点に問題がある。INCOSEの主張するSystems Engineeringは、統合工学であり日本のIT業界が適用しているComponent Engineeringとは異なりコンポーネントをつないでシステムを完成させる工学である。日本のIT業界は、システム開発プロセスとしてウォーターフォール・モデルを採用している場合が多い。このモデルを利用してシステムを完成させる場合、各開発工程が区分されて実施されている。INCOSEのメソドロロジーは各開発工程を区分するのではなく前後の工程とも有機的に連携させることでシステムの品質と期間短縮等の効率化を実現している。言わば、コンカレントエンジニアリングを実現するには必須のメソドロロジーと言える。Systems Engineeringのフェーズ区分を紹介する。Concept Refinement Phase、Technology Development Phase、Systems Development & Demonstration Phase、Production & Deployment、Operation & Support Phaseから構成される。システム開発モデルとして利用されるV-Model(Veeモデル)も日本IT業界は十分活用していない。例えば、V-Modelは流れ図の左側に要求分析から詳細設計、右側に単体テストからユーザー受入テストが定義されている。要求分析に対応してユーザー受入テストに対応するが日本のIT業界ではこの対応が有機的に行われていない。さらに要求分析以降のフェーズの青果物と要求分析がV&V(Verification & Validation)されていない等、改善を図る領域が多い。大規模システムの開発には是非、INCOSE標準適用検討が必須で開発時にはSystem Architectureは必須と言える。INCOSE標準はソフトウェア開発も含んだ総合工学で産業競争力強化に資すると考える上からも人材を多く育成していきたい。

以上